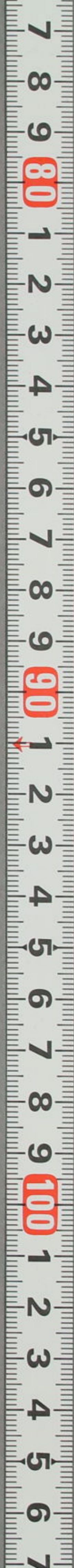
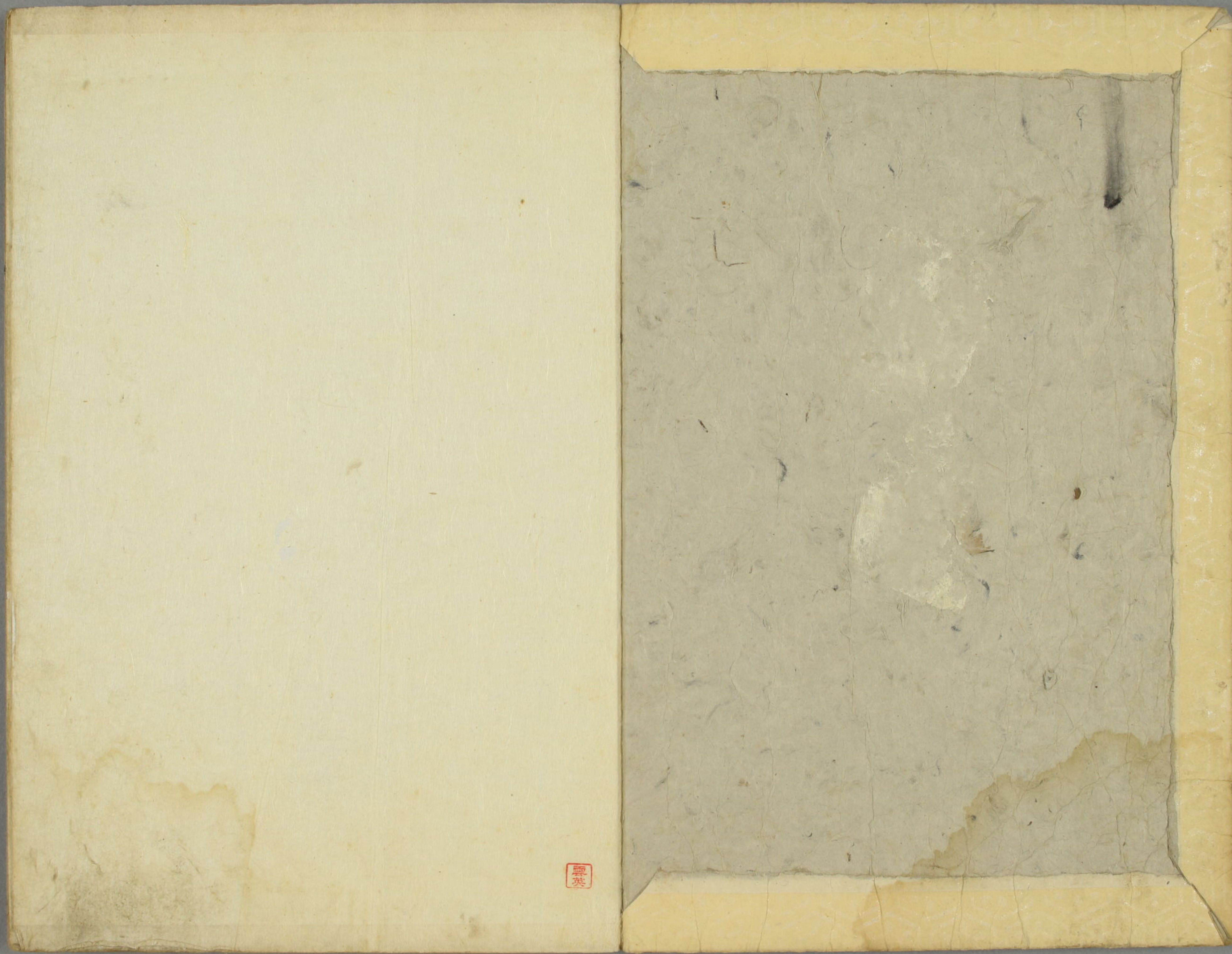




還龜紙料

七





英

小汀氏藏書

一日のありたり時移本相よりあるを
取て部演する半少付大の突て
りふ孔奈幾の重の身よりりはうま
高を仰りて終奈幾現する
指ふり次して調つてこの様
れ活活之鳴呼と相ふと身

遷魂紙首之一

弦無孔れ琴今第一の劣り破意を
補ふは暗り三三技次已答るりふ
さ何くハを魂紙料と概ん
此の取て去放りて名をとせ

足世新扇

還魂紙料目録

上之卷

- 一 千年飴せんねんあめ
- 二 因幡いんぱんの淨瑠璃じやうるり附つ近江節おんみぎ
- 三 鹽屋長次郎しほやちやうじやう
- 四 若衆人偶わかしゅにんぐる
- 五 安阿彌あんあみの作さく
- 六 懸髭けんひげ
- 七 淨土じやうど雙六すわうろく附つ治郎ぢやう雙六すわうろく道中ぢやうぢゆう雙六すわうろく
- 八 淨瑠璃節じやうるりぎの起原おこし
- 九 キリコ燈籠きりことうろう
- 十 喉のどが渴かつといふ諺ことわざ
- 十一 夷屋えいぶ吉郎兵衛きちやうべゑ
- 十二 雛ひなの蛤貝かまぐさ
- 十三 秋色あきいろ櫻さくら
- 十四 來迎らいごう賣うり
- 十五 いここ煮いここに附つ須彌山すだみせん
- 十六 八百屋やちや阿七あちのかぶき

- 十七 梵天國ぼんてんこく附つ六段目

下之卷

- 一 七夕なつたし踊おど小町こまち踊おど
- 二 糞くその看板かんばん
- 三 酢すの看板かんばん三種
- 四 十筋じゆしん右衛門ゑもん
- 五 慳けん貪おん
- 六 玉川たまがは千之丞せんしやう
- 七 柴垣しばがき節ぶし
- 八 江戸えど酸漿すずき
- 九 稻荷いなりの岡おか附つ小砂こすなとり
- 十 浅草あさくさ祭まつりの番ばん附つ
- 十一 煙草たばこの一服いつぷく一錢いちせん

目録終

還魂紙料上之卷

江戸 柳亭種彦編

一 千年館

元禄寶永の比江戸浅草に十五番との館ありその館の名を千年館又壽命糖
 とものか今俗に長谷部との館に千年館と書くと稱する是に記するは寶永酒を以て世に
 知らるるの一奇人あり 今様北四孝 宝永六年 印本 二の巻小田千年の十五番との館あり樂に
 養子のわふのふくそよふからむに中を記すを定めて童ふ稱ぶじ價のを殘さず
 如く酒あり春秋の榮枯と息あり春の一盞ふらちをわけてそのよぬをを
 んると類格とてちの郷町の良のわたりとすうまね云「寶永六年小久
 く教をんるとのまが貞享或は元禄の初より其名をいふ知まづの於又世間用心記 辨別
 未考 一の巻小「淺草の千年館はあちの天竺にて釋迦とる智傍雅事とのり音重初小
 縁のつくは壽命糖を稱ぶるて大さうありさう大道ふら月とぬて天小指し度

おぼろふかきまの〜
 ちつとまそあ〜
 かくのまがちう〜

類栞子

前々 附夕 蓮之 只尺 享保四年の吟あり

浅草を〜
 坐で〜
 知る〜
 吟あり〜
 坐を〜
 との〜
 用心記〜

○中村吉兵衛子年館七兵衛小打扮小月像
 享保年間の一板あり
 丹黄の敷り



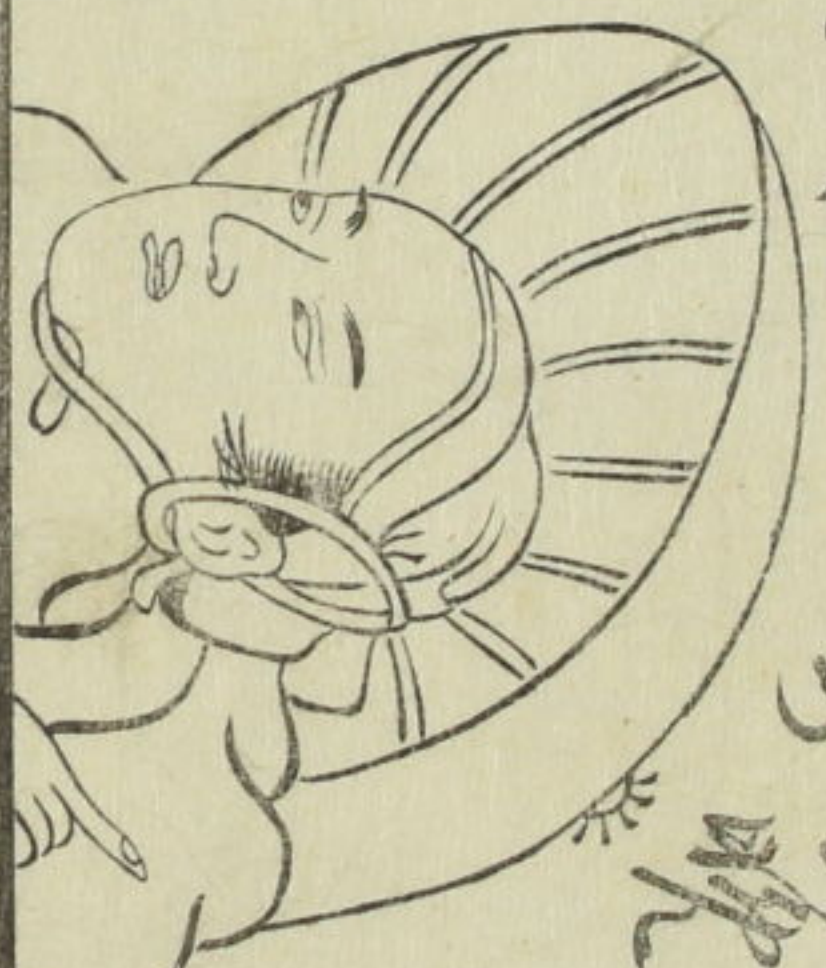
中村吉兵衛の異名と二朱判吉兵衛とて〜
 本舞師とのまが森田屋の〜

為一編圖

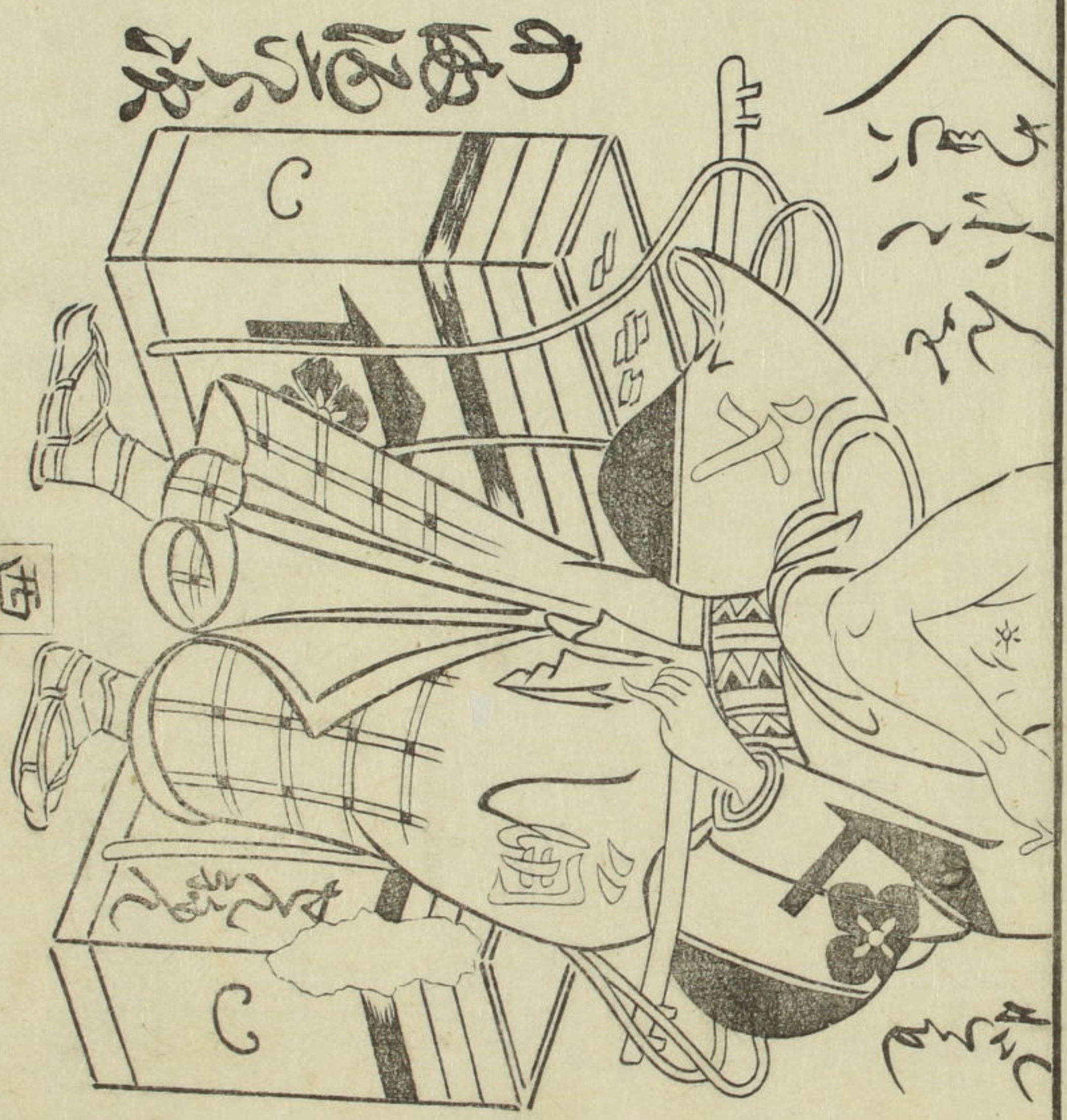


十年暮食糧は日小圓の
 志の散、涼風津波
 雲海大津千歌の歌
 二回記述したる
 此の二つの
 二カノ歌は
 花日道
 九月十日の歌
 此の歌は
 十年暮食糧は日小圓の

〇庵の本此の歌は
 中津浦歌との者
 間の女記



杏花園藏



西村校

巨細の考へては画風
 年餘の世に在りては
 一柱の終るは

花巻本一上巻

土佐節の淨瑠璃水

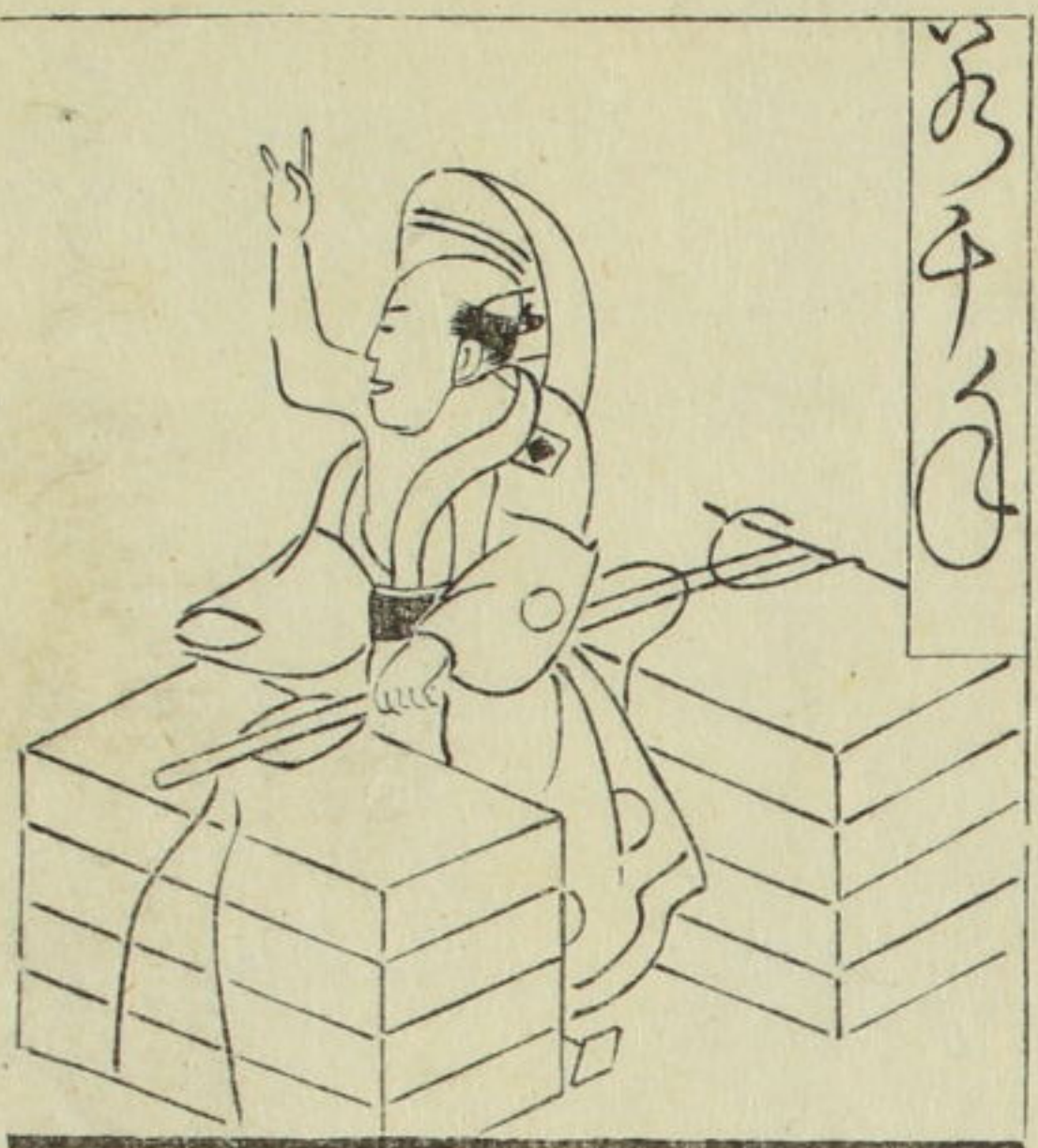
千年

土佐少掾掃部傳左衛門尉近江大夫

ハルギニ 千神んうりの上方フシ
 の神んくこの年迄ハめでた。志の
 ちうとて下キムスヒ
 りぞとて下キムスヒ
 さら又浦志海がも命もこのわたりひら
 海とりやいどあめせく志のちうとて

○按ぜらふ
 正徳 羊間の
 印本あり
 表紙
 木の
 板元
 又一本
 名あり
 甚なる
 板元
 艾神明
 横町
 えとや
 と
 ちうと

土佐少掾の浄瑠璃水
 正徳享保のまろ上木せり繪雙六小此圖あり後年ハ
 ちうとて下キムスヒ
 りぞとて下キムスヒ
 さら又浦志海がも命もこのわたりひら
 海とりやいどあめせく志のちうとて



寛文の頃因幡とのり
 吉原の花女
 浄瑠璃をかたる
 是女の花女
 浄瑠璃をかたる

二 因幡の浄瑠璃附近江節

たゞありとてむく物類

享保十八年

小田

昔の客を信一招請の馳走小田太鼓津溜瀧

二條維もその後者もなればあやほけ見とゆふとて自分とてその籍を

まるとの籍あり殊に女中も終のりくゆきのふくして自分も津溜瀧の籍をのり

吉原に因幡との控女何とておむねえん頼光山人一段異人持の乃乃一段地巻の乃

乃二段大塔宮の乃乃二段教合浄瑠璃四段おむねてかろを女めして名巻言

ことして江戸中に波はせり云

條に江戸町助五郎の拘の大和泉ひさしく男ひて後ろろこび吉又とて中畧五日續

ての大冨上社の後をよららして作花屋内匠が俄小笑して揚屋の巻本まで

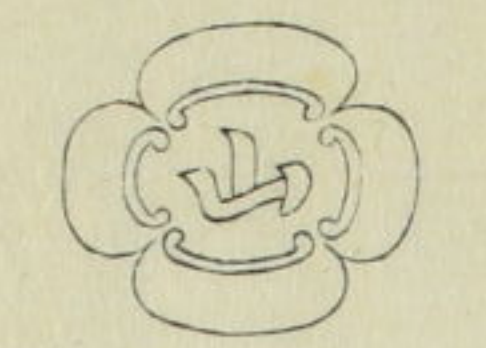
風もいとやね花柳のり人もあてなう日女人のたふおといまきとて毛やとてく

束の巻のり名抄の客かかりてあぐこの男の巻のそ深き巻のれ立別を因幡が

辺の節の津溜瀧云と云えとてどのほのあろの控女が考えざりて下小批出る

讀嘲記をよく寛大中あることを知り

吉原讀嘲記一名々時の太鼓との判梓の年号ありとも寛文七年の作ありと巻中小証あり



いさば ぶき丁 ぬたまつ内
ひさみははるつらつらとみよりあし
くみもまたよろづゆ中い十人の目ら
ふ巻のりあつねもみめすぐいまいて
かり人のたれさひひとて日が同さうよまぬ
かしてさよよりいひなむといわいあるは
あやかりの上りゆのえねわしてせよあや
ふのちの巻のりあはよりあこれりた
いひもあひてるもさうさひいあさう
あいといふ人あけまじくまの九人の女はよりハ
まはるるありよして十人の女はさびてらしの
十とつとヤとんぶ

○吉原のいさば
○周巻の
○控女何
○十人を
○巻軸小をえ
○九人
○いさば

同書のもある天枕との冊子を引てきたれた物。きやらのうほりか。かろも花つがほけとて
まんこがとれせん。いさをがまうるり」とあやむいひりまのいひとてとんまが容顔の携れ

つるぬわらぬと洋瑠璃とくかりをりくすふ各々かりくすむく物産小記
たよりく令り慶長元和のころ六字南無を奉つ。尤門。うたる。あど等て女の洋瑠璃を奉
まわす。かどもその道小わらざる女の洋瑠璃をのりてせえするは周幡を初めなき

花洛六百夕延宝八年印本

前夕 弘 徽 殿 萩の焼糸御考 友吉
附夕 けい せね 節 神 奏の 尾 自悦

周幡がかりを節の名のふりえり 異本洞房語園 享保五年 小田 京町二丁目

劫を奉りといふ若わつてそは時た 丹後が洋瑠璃を安えてかりしが甚く也が

まめて云やう 其方が洋瑠璃を用あれ丹後が奉りまひせも口惜

一流かろく入るは けい 西郎と云と丹後とか合一流小かろく入後小近江を奉り

たれが劫を奉りて西郎と云と丹後とか合一流小かろく入後小近江を奉り

世々各を弘き」といふことと云えり又印本 洞房語園 三年 小 岡崎吉を奉り

之流小を也を師とて浄瑠璃一流と語りい明曆中に受領して近江の大掾と

い後判装束とて語痛といふとわり 語が俗稱勲兵衛が是れを士左衛門が是れを

江 戸 總 鹿 子 貞 享 四 年 小 人 形 町 近 江 語 教 と あり そ こ ころ 是 按 る 小 近 江 節 の

流行一六万治寛文中より起り元禄の比は慶長を其後の冊子ゆりんえす

永花房免元禄十二年印本

前夕 水 花 麵 けい 乃う てん 室 室 長 雅
附夕 終 秋 節 の 道 具 巻 艷 士

二 鹽屋長次郎

塩屋長次郎は叙家附少く太刀かきあり半馬と云吾眼くまふ長次郎

難波小で大流流元禄の比は江戸小下り 原塩屋九郎を奉り

印 小 少 羊 の 事 と の 小 條 小 松 風 琴 の 曲 奉 七 影 人 形 と けい ひ ひ けい ひ けい ひ

いりて碓氷ふくまを写しゆの品玉塩の長次郎まきりふい 又 餘 情 男 元 禄 十 五 年 小 酒 の 巻

口りて牛猪めても飲べしと云すも塩屋長次郎が本戸十二又小の口ふ相應なる

して不皿と持云 比て朝の文あり 怪談諸國物語 正徳二年 松田がかり塩屋まきり

云々 松田かたがりのこと尋う著書 又「輕口」の巻に「江戸塚町めて今度上り方より」

下り方より「長次郎根本」の巻に「おぢやわやく」を吞まて牛をのりまておぢ

は小呼れど「長次郎根本」の巻に「おぢやわやく」を吞まて牛をのりまておぢ

おぢはより「観」の中の子ども五四人立ちあひて「観」の巻に「おぢやわやく」

子どもは「おぢやわやく」の中の子ども五四人立ちあひて「観」の巻に「おぢやわやく」

當時を「観」の巻に「おぢやわやく」の中の子ども五四人立ちあひて「観」

前々附寶船 元禄十六年印本 露月撰

附々 観と吞不動 長次郎の巻に

言水夕集 毛登相 享保二年の印本

羽勢 やさそそ 富士吞 長次郎 言水

言水自注 ぬちや長次郎といふおぢやわやく 放出と目前の山海行路の牛馬と

陽の今 羽勢の眼よの不二とこのむ長の長次郎に他よりけふいふおぢやわやく

縁どりてあり予けるぬちや長次郎といふおぢやわやく 雑言の一ツは慰ふもと 以上 自注

○また引用せし輕口 又寶永七年の印本

寄木との小唄 又寶永七年の印本

松の巻に「おぢやわやく」の巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」

おぢやわやくの巻に「おぢやわやく」



松の巻に「おぢやわやく」の巻に「おぢやわやく」

【四】若衆木偶

むろし若衆人形むろし若衆人形とりのあつりあつりのまじり

婦人の雛ひなと六製作つくりかた

異ことめて小児こどもの

玩弄あそびものをも

却かえりて大人の愛あひ

興きようせいのありとぞむろしの

人情にんじやうおのひやぶ

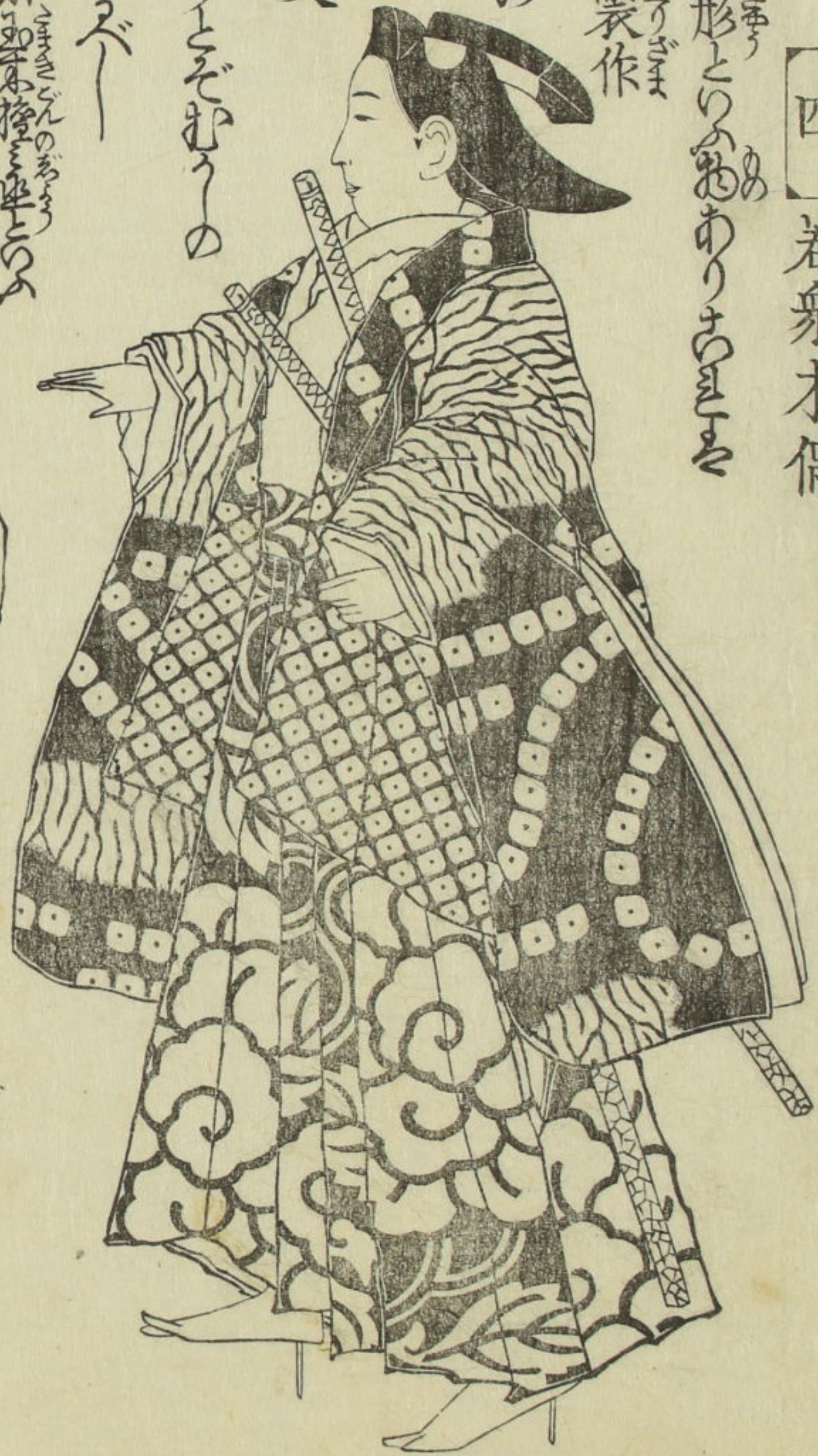
野良虫やらむし明暦年めいれきねんのあつり

かぶき若衆かぶき若衆を許ゆるせるぬか

さるものまじりまじりは面影おもかげ人形屋にんぎやうか

ありとのありとぞむろしの

明暦めいれきのさう



貞享ていじやうの頃ころはあつりの木偶うけをばらさると
 西鶴さいかく二代男にだいおとこ頼朝よりとも本ほん小このあつりあつりのまじりまじり
 人形屋にんぎやう外ぐわい記ぎと鏡かがみを捨すてて云いふと云いふ又また
 吉原きちげんのあつりあつりはあつりあつりのあつりあつり
 細山田ほそやまだ外ぐわい記ぎのあつりあつりはあつりあつりのあつりあつり

若衆人形の

論ろんか

元禄前後げんろくぜんごうのあつり

二ツツのあつり

類るいあつり

髪かみと前髪まへかみの

心こころを作つくりして

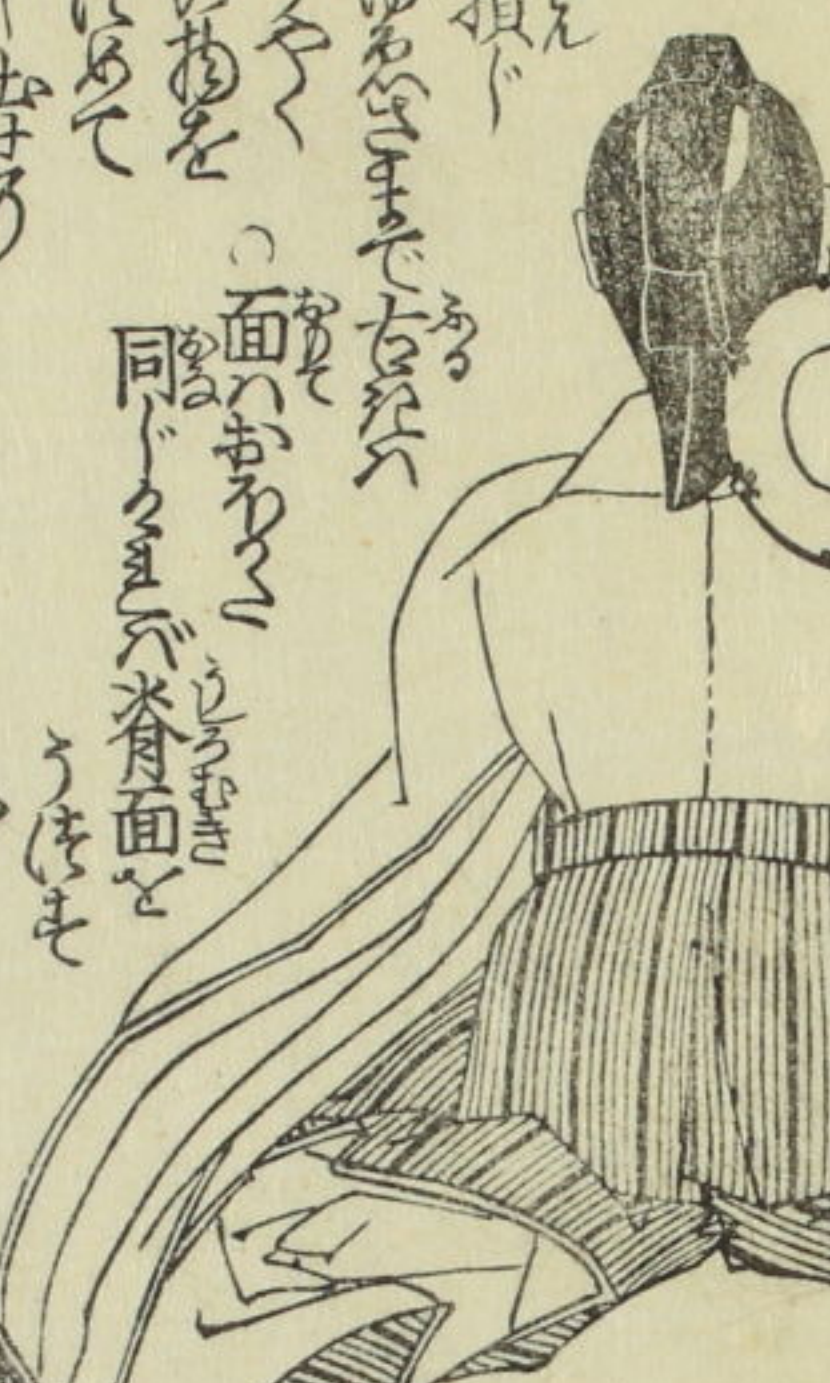
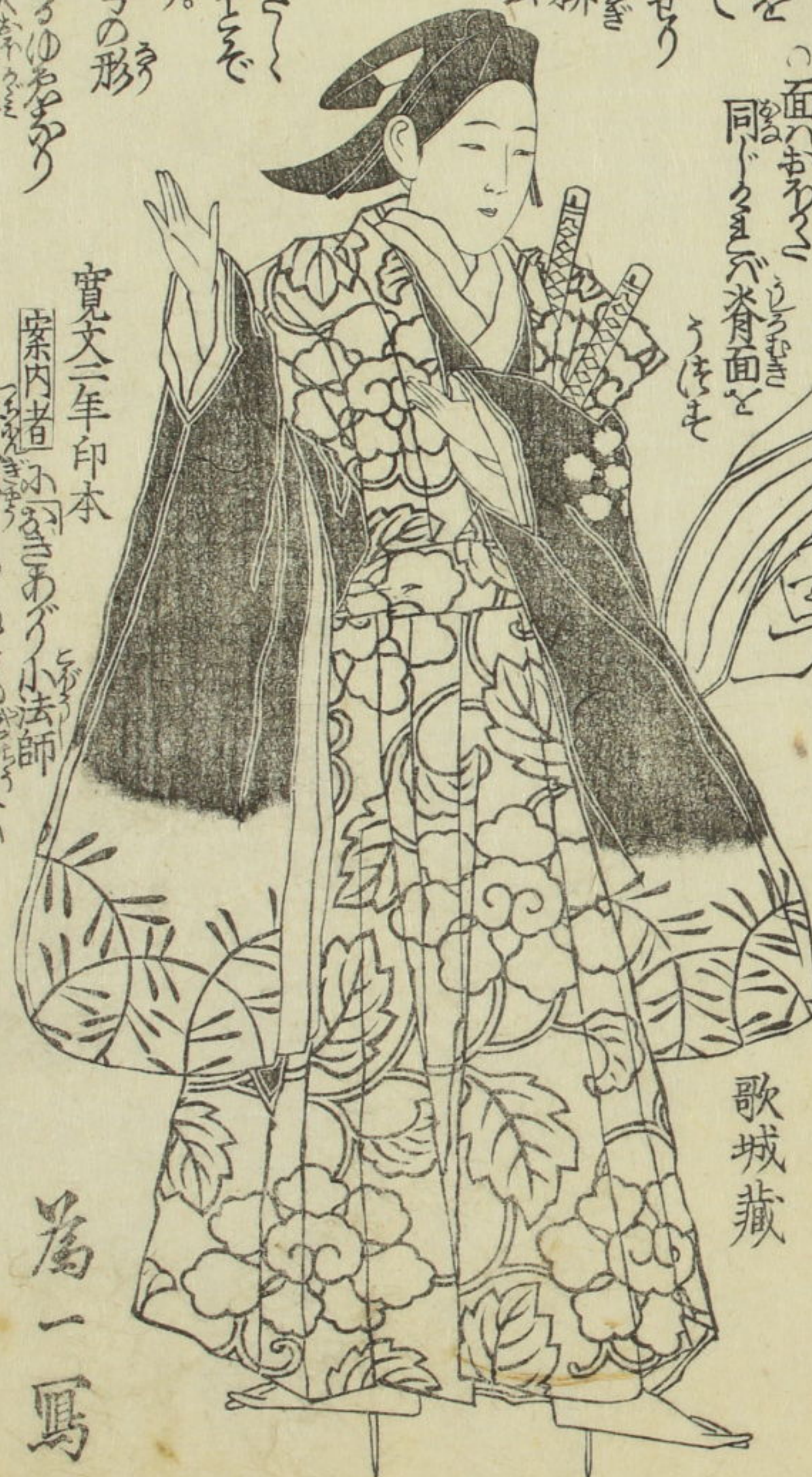
鷗う鶴かくのあつり

鳥とりの尾おしのあつり

折柳せりやうの名な西鶴さいかく大鑑だいかん

鶴かく鶴かくのあつり

鶴かく鶴かくのあつり



歌城うたしろ藏くら

歌城藏

為一馬

寛文二年印本

案内あんない者もの小法師せうぼうし

土人どにん形かたちのあつり

あつり

あつり

中間の安宿の事此所とあり道具と兼かゝる或も長老の髷ゆめて意の奴とあるもの云云と云え又西鶴二代男貞享元年の巻土子の数番屋日本燈うはりて螢賣の里立里子沢の蓮葉をり色こそ見えぬ靴とめ水雞も叩て逃る声あが人の為とて懸鬘布頭巾賣わ云云とあり焼印編笠の類ゆて泥町の茶屋或は船宿ゆて貸も一うまのやまきもあつるあづり作り鬘を俳諧の發夕小ありく見えこれと懸鬘いと稀あり

七百五十韻 延宝九年 印本

前勺 玉梯 金敷 耳せくをまかき 春澄
附勺 久松の雲の掛 髪付めえく 政定 取せよふ好書とせり
再按る小雍府志貞享元年土産門小曰「髷を丈夫の證あり故小男子能優の爲小髷多れ者假髷と着假髷俗小作髷といふ」と記 又同巻小兒女踊躍小用るの具太鼓梅花敷室の木刀假髷扇編笠云云」と並べしりよふの假髷をか懸鬘と同種ゆて原かき踊の具ありをぬふ伎よるまが常の夜ゆふも用ひ下り遊里近く愛あつて

ゆめゆらん 元禄十七年印本 誰袖海小頭巾小作 髪ゆけてといふとあましも西季家小略同ト
六の勺も掛鬘の 元禄十三印本 俳諧三上巻 附合の勺 判付をのそ大名の鬘 朝興
とこの勺は似たり

七 浄土雙六 附治良双六 治良紋揚枝 道中双六

繪雙六といふの漢土ゆをあつくりのわとも本朝ゆあつて書ゆを月を志浄土雙六といふのそ繪双六のすづめあつてきそ小入の頃の項よりあつた詳あつて俳諧の幾勺ゆを万治寛文中よるあり假字草紙小日々をる貞享元年の印本 西鶴二代男小吉原の遊女の拵びたすあまて居ることをいふ條小或も子撲火日と浄土雙六は罪あつてうわをを云云又初音草嚙大鑑元禄十一年印本 小九月の中頃目待をせし小明かきさのあつて小浄瑠璃揚まらわどあつてある中ふの公の善悪のあつてあつて浄土雙六とちけふやうらんへおはるものり餓鬼道へゆくもの一人を佛ありたりとてとらふ云云又今様廿四孝年印本 六の巻小高下貧福世間の浄土雙六とてはが如云云又野傾旅葛籠小あつて浄土

浄土の書に於て居る色のもの黒女の子云々とあり又舞臺万人鬘も浄土浄土を以て
のうは事と載りたるの二書ハ刻梓の年号は推量ありぬ正徳年間の草紙ゆゑ
あちちくくをえたるの潛藏子享保十六年著元文五年印本上の巻ハ此節弘誓の船の足き人もあつて
北五の菩薩も毎日の隙に遷佛圖廻りてあそび居りぬ云云是等寺の書ハいふものを
のつてむつらうの浄土の流行をわらへば俳諧の書ハいふをえたる

新續天竺波集 寛文七年季吟撰

前々 山とよの目もわあすじ六

附々 繪とよも浄土のさまぞ願うき 重信

續独吟集 従兼應中至寛文独吟集

前々 月を浄土の道ひきやせん 玖也

附々 浄土とあがき夜まらあわら 同

雀子集 寛文二年印本

前々 ちの孫が浄土浄土雙六や諸佛名 正次

今様姿 寛文十二年印本

前々 浄土の巻をすき浄土 維舟

附々 雙六とよはくかの身や月の下 同
此夕撰者維舟寛文二年吟也

大坂独吟集 宗因判延宝三年印本

前々 たふとさや同シやうある佛がら 素玄

附々 十方を浄土すじらく 同

江戸大坂通馬 延宝八年

前々 都幸の内院玉かまりの者 梅朝

附々 御忌より浄土浄土浄土 同

前々 ひとぢや月や浄土まじらく 言水

附々 花胡粉緑まじらく 梅朝
○は双六のわら色をりるの由は胡粉緑青と附

西鶴大矢敷 延宝八年吟 同九年刺梓

前々 梵天國より細引をひく 西鶴

附々 浄土浄土浄土浄土浄土 同

又寛文九年梅盛が著したる俳諧便船集の附意指南にも地獄との條に浄土浄土
六と載りて此浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土浄土
目安とて南閩浮州とありありわき目とあまが地獄墮と目とあまが天上と
登り初地より十地等覺妙覺等を經て佛止るを上ととまの遊戯あり



分二りん
身あきさう



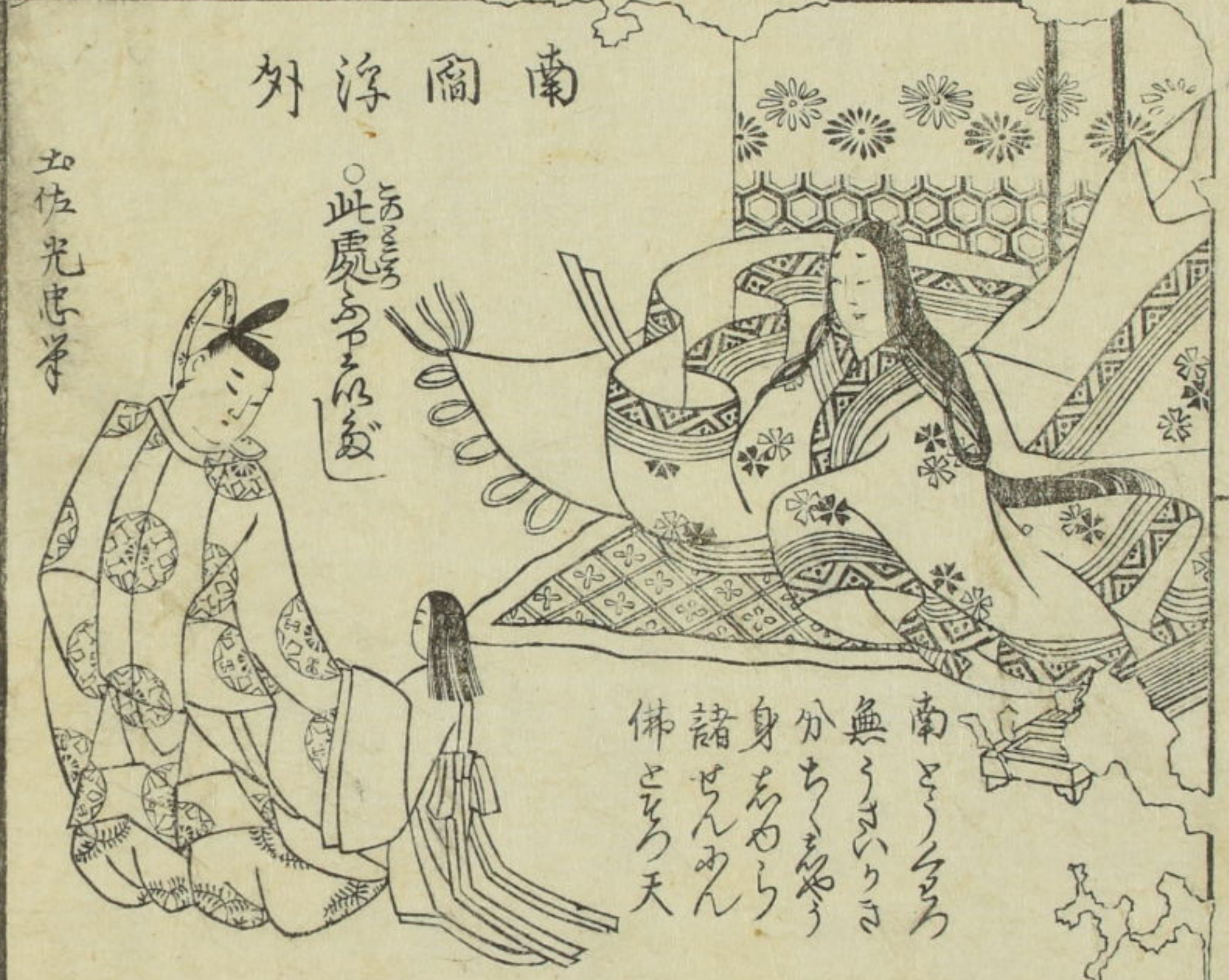
諸けきやう
佛ちんらん



け
諸ふか
佛あすち



諸あきさう
佛あきさう



南園浮外

か佐光忠孝

此處ふたね

南さうらう
無うらうら
分ちんらん
身あきさう
諸せんらん
佛さうらう



諸きよき
佛てうあ



南さうらう
無やーや
諸せんらん
佛せんらん



身諸佛



南大さうらう

あふ撮要して摸さ存ころ土佐光忠が画少て線飾最密一
○氷沉 あふ随まふおく沉でふを故ふ如此号
併諸社撰集 元禄十二年印本

全圖の堅二尺七寸あり横二尺あり

前夕 運のほきあり貝焼か漏 山嵐雪
附夕 氷花の氷花
○因ふ云寶水四年近松門なら作丹波与他の津福徳乃平まてらうの段ふ
六字と六くみきまむさう木花のまをま中み三とのり道中双六も鳳の津土
諸佛の六字を且てお月ひのり

○此處の字の



為一摸

諸めうが



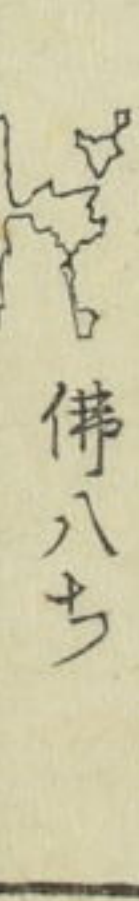
諸六ち



佛七ち



諸七ち



佛八ち



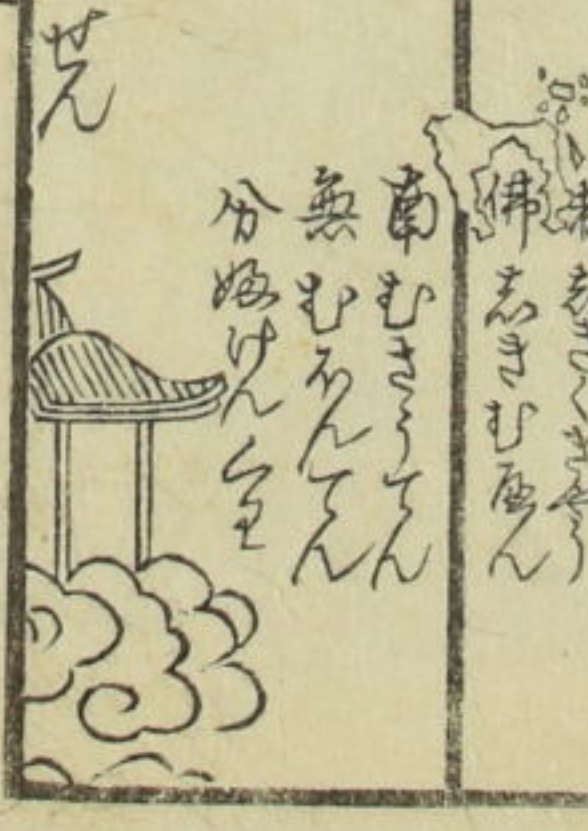
諸八ち



南七ち
無二ち
分七ち



南七ち
無二ち
分七ち



南七ち
無二ち
分七ち



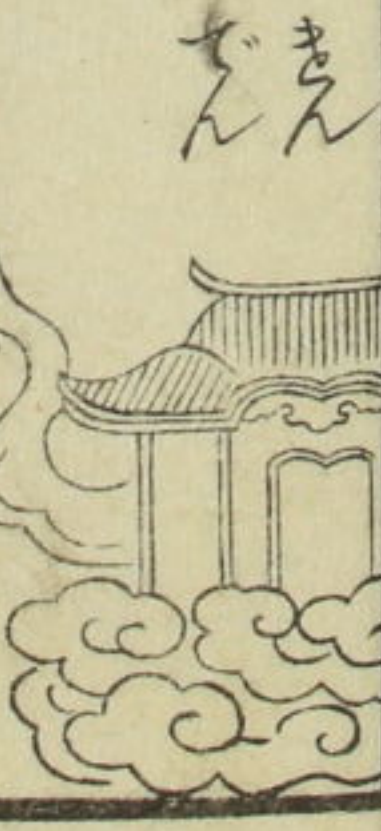
佛やち



佛九ち



諸九ち



七ん



七ん

各目双六
の天台の
各目と集
一の也
繪双六
の也
今も印行
の物にて
佛法双六
といふ

此雙六の起ふ種々の説ありて漢土の選佛圖とのおりのそまを写し物とのり長嶺が
名物六帖の五雜組を引て選佛圖と假字と附たりまふ載一 潛藏子も此説ゆりて
選佛圖の字を用ひて又一説往古より名目雙六とのおりのそま初学の僧の天台の
名目を言させんるゝ作の物にて弘安中の或書未学の僧と罵る初名目双六も知れり
のこのおりのそまと繪双六とのおりのそま起りとも云又異説昔熊野比丘尼が地獄極樂乃
繪卷とひき婦女子に投華とて繪説せし思ひて其て製表とも他は又マとの説是のそま

南 又種



南 分 無 南 分 無 南

南瀾浮列



佛 諸 身 分 無 南



全圖豎四尺横二尺七寸余丹緑青の類

十二

分 身 西 緒

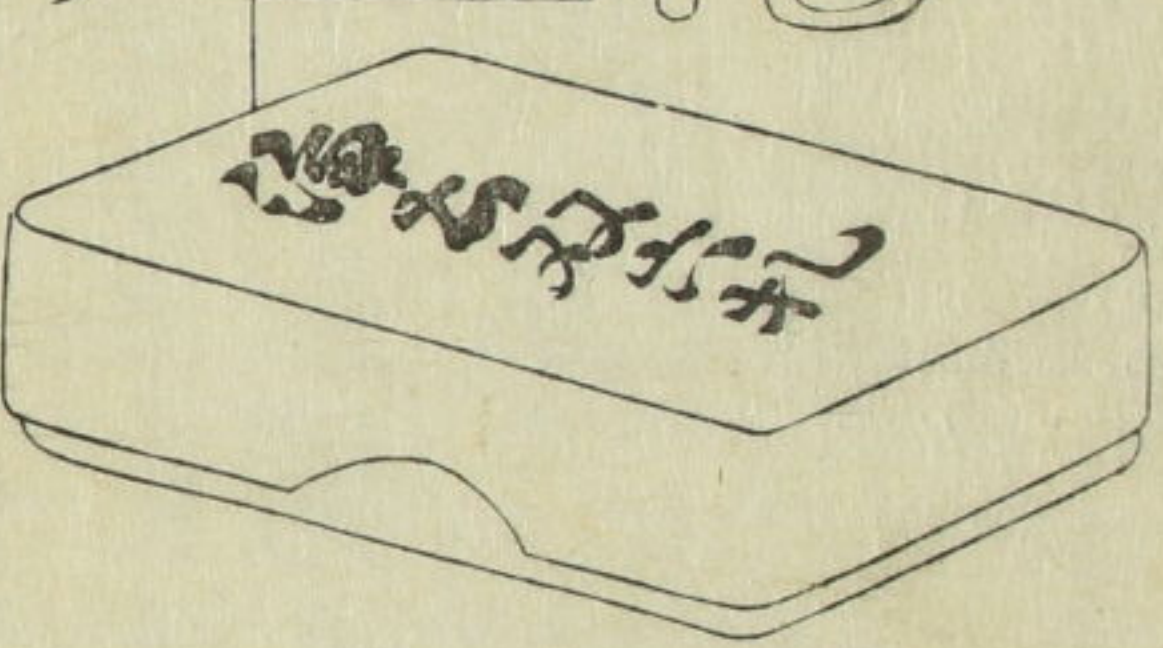


其証下... 天和の書目録... 貞享元年... 寛永正保... 道中双六... 野良双六... 延寶... 寛永正保の比... 寛永正保の比... 寛永正保の比...

浄土雙六の牌匣

浄土雙六

文字如此
金粉中時
箱の外黒塗裏雲母引紙
布目地
梅花の紋あり



或人浄土雙六の札筒のふたを蔵せ
牌の紫檀中時北鳥を時給る
此札筒の小兒の玩弄せり
此札筒の目印とてか雙六を
匣の大サ堅厚九分横寸六分深サ壹寸
五分のり
金粉中時書跡いと古雅あり
うはめして上出せり

西村屋



京都の俳士伊藤信徳江戸小栗の松尾桃青山口信章素堂の
信を于時延寶六年見と江戸三吟と歌て上木を其巻のうらふ
書肆永寿堂の板人存あは懐中とののりゆて元禄の比乃
彫るべし
あふ模其の四十三箇の披略を全圖豎壹尺横壹尺五寸なり
桃青
信章
信徳

前々
息のくさたも伽羅のかを
又附
野良
信徳
桃青
信章
信徳
紀子大矢敷
西鶴大鑑
貞享四年印本

七の巻の「えび」を徳助の根本浮世揚枝とて其居る元祿の定紋をうちつけし
 せしむるのむすく其後に抄のからひ及び死入せめて其後には抄に
 「とわるをては」合して考べし。野良抄の終とのふ雙六と附る中前
 條の論せしむる當時延宝を既野良雙六とて中をあらへし後去
 野良抄の終に後をかりしとの吟めては其の終り延寶の首を
 類棋子

前勺 應よりて黄もくすね花を
 附勺 其角
 附勺 琴風

八 淨瑠璃節の起原不安定之事

かたもゆい野良雙六といふの元祿の出来で存在せしむる
 淨瑠璃節も何某の侍女小野阿通がはる十二段小起るとは
 十二段小起るとの説をさすものべし何某の侍女が作といふ非
 守武千々 天丈九年の吟慶安の印本及古写本にて参考

前勺 浄瑠璃の流形は
 附勺 浄瑠璃の流形は
 又附 浄瑠璃の流形は

あは天文九年の千々あり當時淨瑠璃の流形は
 何某の天文元年の生えは千々の刺僅九歳阿通との侍女の
 幼稚の者を慰めんとして綴り物ともおもふ不審とふ思ひより
 又二の証を添へり

栗屋軒宗長日記 享祿四年の條に八月十五夜九月十二夜ハ
 半豆をもちて神の男あがの女も月入るといふ八旬有餘の老拙
 して月見あきてこころは月ぬやとかのひ出て南の縁の
 やまははぬわたりとて範甫老人曰ふ徳裏とそ人のせ送る

そのひ月まめ小豆とてやまのこころぬいもこころの
 旅高たけの二兩輩人をほろり小産のわらふ浄瑠璃とて
 おふ或その後より浄瑠璃とておのくたちわらふよわまり
 はけてよと傳ゆる

たの孫こそよくやせさう先を後とてこの月のあよびて
 その名掛さびしむらひやるべしやてをどあむむかうと

らほれあく... 推心... 月めて

は紀... 浄瑠璃... 何未が侍女... 九

九 キリコ燈籠

きりこ燈籠... 紙捻... 予... 附夕

新撰大筑波集 永正年間 山崎住宗鑑撰

前夕... 附夕... 生... 木... け... の...

ふら... 生... 格... 火脚... 附夕... 附夕... 附夕

こ。梯の事... 上略... 予... 正章... 前夕... 附夕... 踏て... 是で...

正章独吟百韻 寛永年間吟

前夕... 附夕... 機... 浦... 能... の...

踏ての... 是で...

はで... のとを... 角... の字論... 十

十 喉が渴とのり諺

身小應... 身小應... 喉が渴... 諺

いふとあまご其原も服の事いふのむ醒睡笑作元和九年 五の巻小曰「小性後住とよむ小
 金作の脇差さうたる人へちや茶をきびくすこびて餘の方へと目をはむ末座の
 人彼が心を推し我指差を二寸抜そのあ若衆との鉤もちと茶を吞せのまこと
 のに」といふ事あり案るふけむの結むうも普く人口ふわす一有金作の刀を
 さうさるものを喉がわさうと戯れふいひあづ。是茶を人の吞まべき料小金作と
 言ふるやと外意ありそとが遂も美服の事ふはり喉が渴くうとゆふべきを喉が
 かさくでわらうと訛す」とかかり

江戸向文圃 延宝八年印本

俳諧一幅半 元禄十三年印本

金葉 金葉に咽りうさや節少純

湖夕

二葉子の夕を茗の葉と金作とをありそれの喉がわさうとゆふ茗のあを吞らうと
 して。喉がわさくでわらうと言化してはの意ありわて解べ

うさ草紙小糸類聚
 とのふ菊のり金鶴も

菊の湖夕の夕を節小袖の常にかたりて美をあらをいりて金鶴の喩小假らう年であれど
 喉が渴かといひ古意小合。金葉ふいりてははるる節。是等の夕よりて金作の
 刀より出る諺あるをゆふべ

又曰

俳諧猿蓑 元禄四年

前夕

迎ひせしうき 船より

去来

附夕

夕と人ふらうる船の中をさ 芭蕉

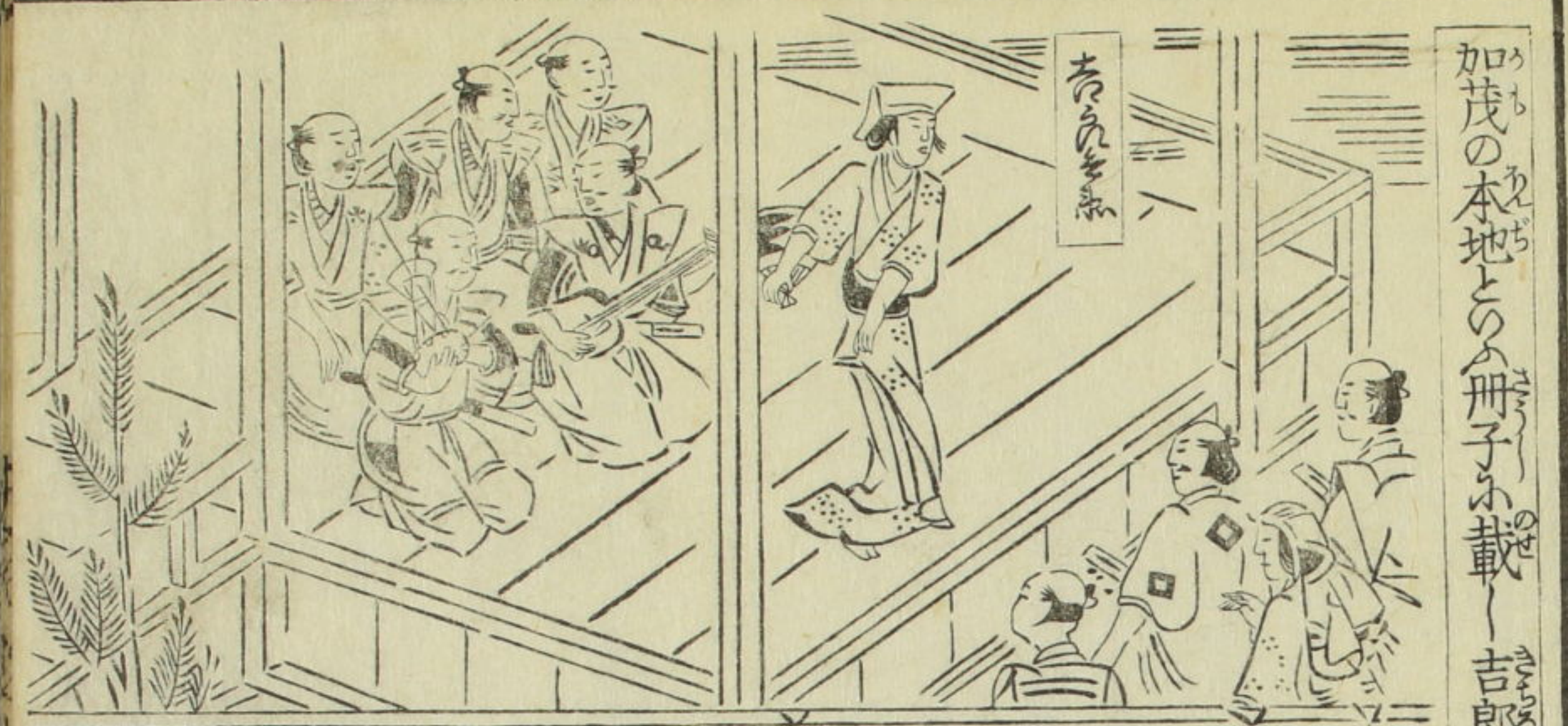
は滂わらう一衣に富貴あるを金葉といひ。是又は賤者の自ふありて作はし
 めて美服をあら金葉小法て嘲らるるまことある美服をあらてはそれ残が却て美
 人もあさかろれ能らんやそれといひは考べ。昔はあさかろるるをあらより出る

十一

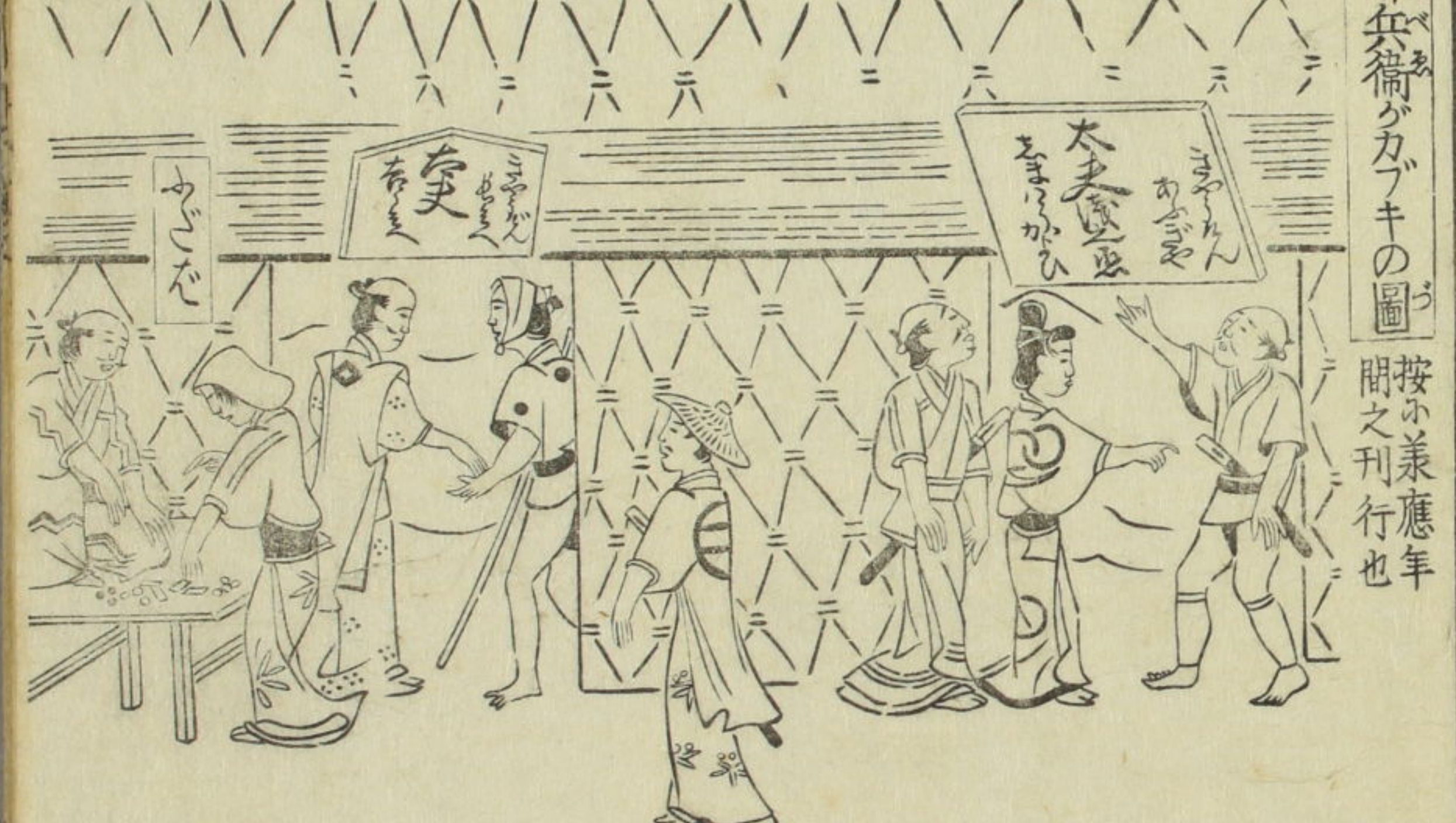
夷屋吉郎兵衛 附 傾城買の狂言坂田藤十郎

夷屋吉郎兵衛の右近源左衛門と時をわかして美應明曆の心を盛ふ経たるがさ
 の女方あり浅井了意が作ありといふ浮世物語 明曆方治 四條川原の事と云條川原
 出るは浄瑠璃のほり女方の歌舞妓崩戸ふよりある事かましくわらえて名小

女方の上の子は屋吉郎也湯そのうち小太坂社左衛門の江戸勘合備が湯はじりおれとの
 湯をさるのやうな小瓢金の浮世房のちくく空ゆかまて云々又東海道各所記開印本
 江戸と夷屋吉郎兵衛大和屋六兵衛村山又兵衛は三兵衛が太鼓をうちたくその
 かへりのちの勘太郎とゆへり又九郎主馬の助あつてつるのちのちの道外
 の腹筋とつる云々此のねえは川原のつる小入と云々又都風俗鑑延宝九年印
 蔵書 二の巻小むうへびまや吉原湯たの湯たが女形とてをせしとゆへり拭
 ひく糸絹きまをかめて女ごとのそのひのふ今何者仕出へ糸絹にて眉をすのりそまた
 髪をうもてうげうと名けてうりあつてなれ云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 兵衛が圖といとちひさしてうもてうりあつてなれ云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 りて老ふふ船中てお湯入の延宝の江戸のまきと云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 ちめあつて寛文の末にさるる元禄中京都の俳士林鴻が著し「産毛」といふ草紙に「糸の
 撥之妻屋の吉原湯が扇のふり名のと抄りて土の骨もあ」といふ當時までの
 人口小抄り舞の上手を



如茂の本地との冊子小載 吉原兵衛がカブキの圖 按小兼應年 問之刊行也



江戸の湯屋の湯は著 舞曲扇林
 小太坂社左衛門の江戸勘合備が湯はじりおれとの
 湯をさるのやうな小瓢金の浮世房のちくく空ゆかまて云々又東海道各所記開印本
 江戸と夷屋吉郎兵衛大和屋六兵衛村山又兵衛は三兵衛が太鼓をうちたくその
 かへりのちの勘太郎とゆへり又九郎主馬の助あつてつるのちのちの道外
 の腹筋とつる云々此のねえは川原のつる小入と云々又都風俗鑑延宝九年印
 蔵書 二の巻小むうへびまや吉原湯たの湯たが女形とてをせしとゆへり拭
 ひく糸絹きまをかめて女ごとのそのひのふ今何者仕出へ糸絹にて眉をすのりそまた
 髪をうもてうげうと名けてうりあつてなれ云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 兵衛が圖といとちひさしてうもてうりあつてなれ云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 りて老ふふ船中てお湯入の延宝の江戸のまきと云々此の事を載りうのふ摸したは吉原
 ちめあつて寛文の末にさるる元禄中京都の俳士林鴻が著し「産毛」といふ草紙に「糸の
 撥之妻屋の吉原湯が扇のふり名のと抄りて土の骨もあ」といふ當時までの
 人口小抄り舞の上手を

因小云今更なるを其の書耳塵集小坂田藤十郎が語小曰明曆三年ゆゑのりて其の
の芝居止るなり十二年を以て寛文八年三月朔日再芝居魚釣ひりて其のりて其の
口上出でて今今けいせの買の袖のりて觸てまふ入の村八郎を其のりて其のりて
加加に銀簿ゆて麻の角と袴のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
あつたつたり小技のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
出て正面のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
けりりや四角のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
右の麻袴の腰を袖ぢり古の杖を腰にけり貝拍子と持て出早に且形おのりて其のりて
そのり其主がて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
あつたつたり小技のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
又そのりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
金入の衣装その時分のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
ゆて地狂言の女形のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
笑ひのりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
まふが狂言の一番ありて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて

は密のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
又云坂田藤十郎と京都のカブキをりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
三つで没とわふ逆算をりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
ぬのりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
俳諧若葉合吟元禄九年
前々 必のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
又 俳諧大郎河 享保十五年 小和專が附合のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
是十のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて

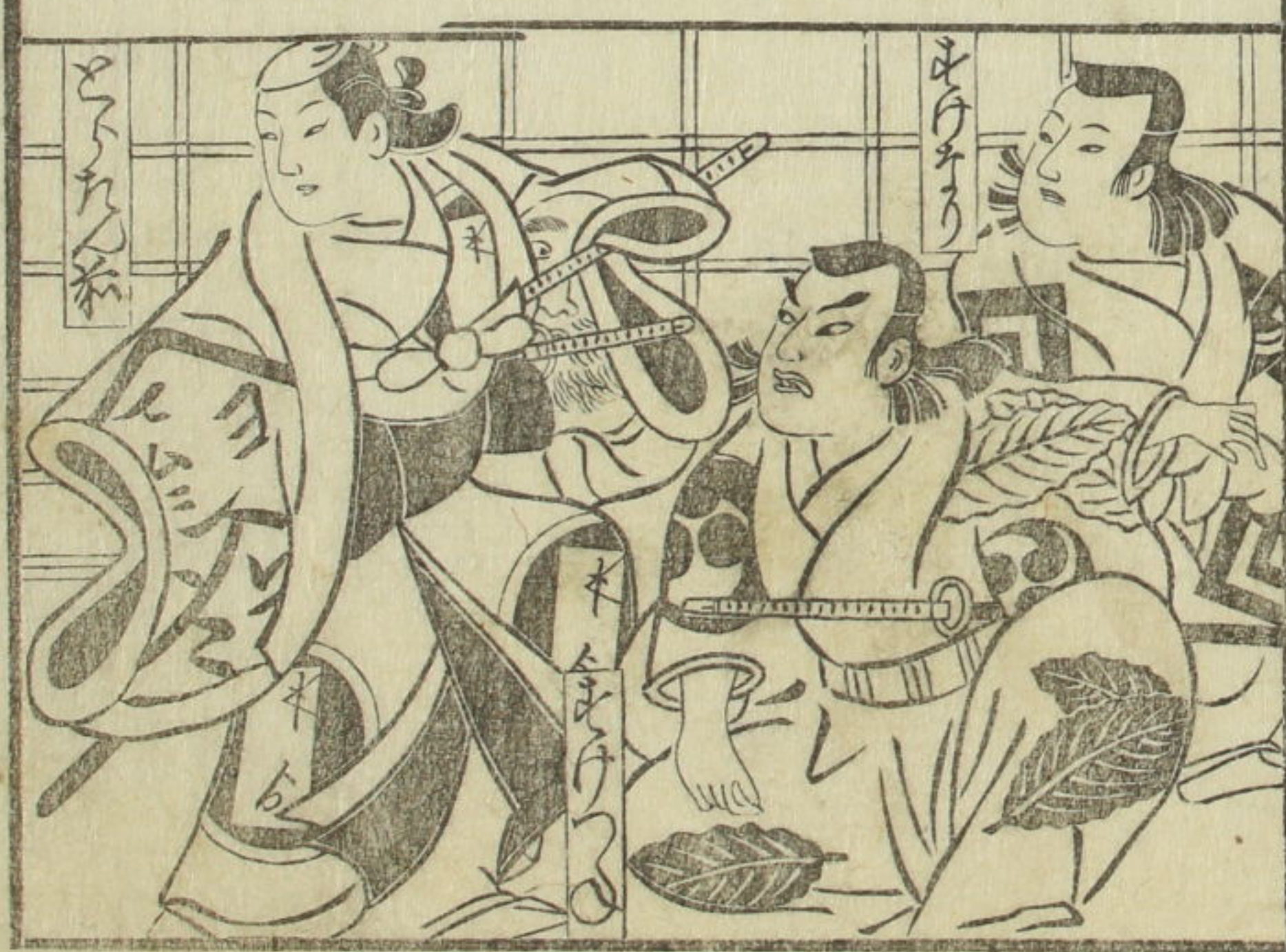
十二 離の蛤貝
古老の傳へて云むりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
叙めもわきけりりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
とら草紙小離花ひのかりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
今の草冊子の類めて刺梓の年号ありて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて

今更なるを其の書耳塵集小坂田藤十郎が語小曰明曆三年ゆゑのりて其の
の芝居止るなり十二年を以て寛文八年三月朔日再芝居魚釣ひりて其のりて其の
口上出でて今今けいせの買の袖のりて觸てまふ入の村八郎を其のりて其のりて
加加に銀簿ゆて麻の角と袴のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
あつたつたり小技のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
出て正面のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
けりりや四角のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
右の麻袴の腰を袖ぢり古の杖を腰にけり貝拍子と持て出早に且形おのりて其のりて
そのり其主がて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
あつたつたり小技のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
又そのりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
金入の衣装その時分のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
ゆて地狂言の女形のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
笑ひのりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて
まふが狂言の一番ありて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて其のりて

嵐喜代三郎と云ふ女方阿七の役とははらむ阿七ごとをかぶるふあせのまらあり
 かの喜代之弟が紋丸の内対と云ふもあつた今にわけて阿七の狂言ふは紋と云ふ
 寶永五年の阿七が九七回忌より比地蔵坊正元と云ふ老ぬすりぐぬ六地蔵と
 建立も俗の名を吉三郎といひるゆゑ吉三道心と人ト云ふは七が菩提のぬすりと
 りの批判を狂作者津打治兵衛が七が怒るなり男ハ吉祥寺の小姓吉三郎と云
 作らるる吉三道心とは老年ゆて天和のなぬ地蔵二軒建立のまらと云と記して
 人のよく知る話あり按るふ対ト文の紋の喜代之弟に起りしと云ふ説は是
 其餘の説は是非はよくされば貞享三年の印本五人女四の巻小於七がと云
 怒る男を吉祥寺の小姓小野川吉三郎と云ふ又寶永元年紀海音が作八百屋阿七歌
 祭文と云ふ浄瑠璃も彼五人女の人名と仮用しり原采吉祥寺の小姓吉三郎と云
 偽名ある事論ありと云と云く貞享の冊子ふんを山嵐曾我の刺小津打治兵衛が
 刺小作りまらけしあつた又於七の狂言と山嵐曾我ありと云ふも誤あり

山嵐曾我
 嵐喜代三郎
 阿七
 山嵐曾我
 阿七

嵐喜代三郎
 山嵐曾我
 阿七
 中村傳九郎
 中村七三郎



此狂言の繪本をうぐ山嵐喜代三郎の遊君虎ふお扮のこめて被八百屋を七が事さふふ
予あつらひらうひさし百余里の山海を幾の地お存と百余年又百余里と還て今柳亭ふとむ
追善と阿七が廿七回忌とお混とる各額中て此二種の狂言を作者中村七三郎とわり
其刺印行せりのあま証とるふ足し津市治あるあが作とのめ信ごと
ことを編とるも其刺板の彫るものにて宝永五年三月の奥書ありはまじふ
いふとらと彼岸様の狂言のありむきと略似り法号華野等父の恩ふんをさる



追善彼家様

標題
かどの
ごう

追善彼家様	中將	是好	方便	質二	質三	信解	才足
中將	是好	方便	質二	質三	信解	才足	
中將	是好	方便	質二	質三	信解	才足	

此標目狂言繪本のすめめふをえて見まふのめとく八百屋が七のかぎきりて其終りのまこと

此標目狂言繪本のすめめふをえて見まふのめとく八百屋が七のかぎきりて其終りのまこと

たきわけて補伏ゆかりやうくまごちのりひめて逃三飯Pてと王のかえらうえぞ

まごにびんでんぐくそうく云「是の亡命の事をり又松の葉元禄十六年 小哉」

一夜かふとふ山國た「げふはまごのたさあまはねくくこののんやわ中略」

かぶとのぞもめのみえちやくえんぐのたよひまのまがんでんおくふあるとて

ゆのびくへむせま元禄の梓刻あり一月号ゆて「ふり入意ハ三幅對」と同かぬ其原

ま浄瑠璃より出て花街の派言めてゆけあるべ上は披出せ一冊子のまかまたんせんたが 遊里のまをの儼かきをさう 又團扇置

座敷狂言元禄十四年 一者の月小二月三月もやまぐりのらせのぐわらうその節か

あんだぬもびんでんをうごまうかあ云「此冊子と江戸世かうふとわをんんん

浄瑠璃浄瑠璃ごうごふとふとあう「今がんでん國をうふとふ其原を知りて訛まあり。借

り永開八大夫等が正本と稱一のあり被浄瑠璃の古段目の終に

中かふんどのがんでんはうのあひらのごせんをまかたうわげあがまかたうらん

尤のまじり
まじりまじり
の段かまじり
あふ天徳
のまじり

まじりて日本のたれういせんとて又大おんどのをうんあやうかろうてまじり
がんでん王のおひらのあせんをおそ入五でうのあひのうんおんてん一のまじり
てまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
てんのつひとかくとうやそのの中あさんどのたんだんまじりまじりまじり
ごせんをゆりてわりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
わまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
あひまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
ためまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

とわが彼祝言ふかろ文章あり百年のむうまでも流行浄瑠璃とわが
かぎき狂言ふもせうとわり元禄十四年森田座の狂言本梵天國寶船と願せ
るふ彼梵天國の浄瑠璃ふあひて宮崎傳吉がはくまう狂言あり

西鶴が俗語「江戸まじり町のまじりを画て今日よりがんでん團市村守五郎のまじり市村
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

因云むうの浄瑠璃へ徳て六段あり十二段を裂京都せと井上播磨しる五段ふは
くわまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

津瑠璃つるり六段ろくだんのりゆるん何ゆめとてはぎりのこの程の事と六段目ちやゆどの入彦いこひこ今もまじくふいふのわきて彼梵天國の意に通じるとわり又末一段といふもあはじ

江戸八百韻 延宝六年印本

前々 對決たいけつ乃 協けいかへんかへんき 来雪
附々 心こころ暇ひま日ひも 福ふくふ 傾かたむき 青雲

五十番夕合 延宝三年糠塚翁判

むーのまま末一段のゆへくを 藤簾子

俳諧二番船 延宝八年印本宗圓撰

前々 さゆさゆとてのまま見みあけあけくく
附々 かの歌うた末一段ふか多た後 栄親

俳諧富士石 延宝七年印本 調和撰

人形にんぎょうや末一段乃 夏なつむくへ 素白
柳亭曰人形と木偶こけいあり 味あじ一段中六月と安やすせ 利口りこうあり

三茶之幅一對 延宝九年 着枝あきえとふふ拾女しゅうにょを評ひらむむ容顔ようがんむるむるんん一一齊せい筆ひつももすすや五六段目だんめまでかかううははけけももつつ入いののううぶぶののべべーー云いにに又また々々俳諧はいかいふふんんええここらら

前々附歌ぜんぜんぶつががが元禄十三年印本一名馬うまででひ

前々 編あはゆゆめめゆゆででややすすむむ繼ついで
六河ろくが流りゅう珠しゆ末一段すえだんの 後 々の作者さくしや不知しらず不ふトトの高たか点てんあり

是等の冊子をてじのを存ぞんててんんふふ梵天國六段目末一段の諺ことわざへ津瑠璃つるりより出いせ

○再日ふたひけんけんののをを引ひくくのの子ことともも老らう氣きととたたはは皆みな取とりりてておおんんででんんををささせ

ぬぬののそそおおろろ一一わわとのの事ことわりり是これのの著ちやく筆ひつのの者ものををささうう一一全ぜん報ほうをを負おけけ取とり

とををりりつつるるままりり此冊子刺梓このさしの年号ねんごうとと綱つなとといいふふもも画風がふうををりりてて按おききふふ万治まんじのの比ひの

印行いんぎょうゆゆくく若わかたた引ひくくのの難なん波は証しやうのの難なんりりああるる冊子さつしありり此選魂紙このせんこんしの草稿さうこうありり

後のち又また出いせせられればばああるる書載しよざいてておおききりり

還魂紙料上之卷畢



彩雨欣庵
九賀



